台大日本語文研究第 45 期
2023 年 06 月，頁 45-63
2023-03-31 收稿，2023-05-22 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202306_(45).0003

川上弘美《水聲》中〈夜啼之鳥〉的多義性解釋

齋藤正志*

摘要

作家川上弘美於 2014 年以單行本的形式發行的長篇小說《水聲》是一部描寫聆聽「遙遠世界的角落（略）涓涓細流」水聲的「我」與親身弟弟之間禁斷之愛的作品。作品是以「東京地下鐵沙林毒氣事件」為背景，由於弟弟因捲入此事件而意識到死亡的存在，這也成了姐弟開始同居的契機。作品中以一個章節的篇幅在描述姐弟倆人最親愛的母親過世的內容，成為一部更讓人意識到死亡存在的小說。這個描述禁斷之愛與死亡的小說在作品世界中，開始與結束時皆是以「夜啼之鳥。那是一隻短暫、粗聲啼叫的鳥」的描寫來開始與結束。但是，文中對於夜啼的鳥類並沒有給與詳細的名稱。＜夜啼之鳥＞有可能是英國文學中出現的夜鶯，或是日中文學中出現的杜鵑鳥、貓頭鷹、大雕鴞、夜鷹等可能。本發表將探討有關於這些鳥類的引用關係，來思考多義性解釋的可能。

關鍵詞：川上弘美、《水聲》、死亡、＜夜啼之鳥＞、多義性解釋

臺灣大學學術期刊資料庫

* 中國文化大學日本語文學系教授

Ambiguous Interpretation of Birds Crying at Night in Hiromi Kawakami's Suisei

Masashi Saito*

Abstract

Hiromi Kawakami's novel “Water Voice(Suisei)”, published in 2014, is a story about the forbidden relationship between “I” and my younger brother who listens to the sound of water “at the end of a distant world [omitted] in a modest stream”. It is a work that speaks of love. This work is based on the “subway sarin incident”, and the siblings will start living together because the younger brother who encountered the incident was conscious of death. In addition, a chapter is devoted to the story of the death of the they beloved mother, making the work even more conscious of death. The opening and closing of this world of forbidden love and death is the “thick, short chirp” of birds on summer nights. The specific name of the bird is not mentioned in the work. Therefore, this “bird singing at night” includes the nightingale that appears in British literature, and the hototogisu, owl, horned owl, and nighthawk that appear in Japanese literature. It is possible. I will examine the relationship of expression citations for these birds, and then consider ambiguous interpretations.

Key words: Hiromi Kawakami, Water Voice, Death, 〈Birds singing in the night〉, Interpretation of multiple meanings

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, Private Chinese Culture University

臺灣大學學術期刊資料庫

川上弘美『水声』における〈夜に鳴く鳥〉の多義的解釈

齋藤正志*

要旨

2014年に単行本として発行された川上弘美の長篇小説『水声』は「遠い世界の涯（はて）にある【中略】ささやかな流れの」水音を聴く「わたし」が実弟との禁断の愛を語る作品である。この作品には「地下鉄サリン事件」が背景にあり、その事件に遭遇した実弟が死を意識したことが理由となって姉弟は同居を始めることになる。また、作中には姉弟最愛の母の死についての話に一章が割かれており、いっそう死を意識させる作品となっている。この禁断の愛と死を語る世界を冒頭と末尾で括るのが「太く、短く鳴く」夏の夜の鳥の声である。その鳥について作中では具体的な名称を述べることがない。そこで、この〈夜に鳴く鳥〉には、イギリス文学に登場するナイチンゲール、そして日中の文学に登場するホトトギス（時鳥）・フクロウ（梟）・ミミズク（木兎）・ヨタカ（夜鷹）などの可能性が考えられる。これらの鳥について表現引用の関係を検討し、その上で多義的解釈を考えることにする。

キーワード：川上弘美、『水声』、死、〈夜に鳴く鳥〉、多義的解釈

臺灣大學學術期刊資料庫

* 中国文化大学日本語文学科教授

川上弘美『水声』における〈夜に鳴く鳥〉の多義的解釈

齋藤正志

一、はじめに

平成 26 年（2014）に文藝春秋から単行本として発行された川上弘美の長篇小説『水声』は、実弟との性的関係を持つ「わたし」が不意に聴こえてくる「遠い世界の涯（はて）にある、こころもとなくて、ささやかな流れの[1]」水音を聴くという話である。「わたし」は都（みやこ）、実弟は陵（りょう）。姉の名は日本の首都をイメージさせ、実弟の名は天皇が眠る墳墓を意味する漢字である。この小説は二人の主役の名に最初から意味を持たせており、姉は地上で生きた政治を執る場所であり、実弟は地下で死の印象を持たせるものである。

この二人が互いを愛し合うのは禁断の近親恋愛関係だが、実は彼らの母もまた異母兄に愛されながら、別の男との間に主役の姉弟を産んでいる。ただ、母は異母兄と同居して夫婦同然の暮らしをして、姉弟に自分たちを父母と思わせていたが、異母兄との間に性的関係はないと明言する。したがって疑似的ではあるが、姉弟の一世代前にも近親恋愛が成立していることになり、二世代に渡る近親恋愛の家の話ということになる。また、前掲の都が聴く水音は、明確には何処の水音なのか分からないが、都が大学二年の時、奈穂子と一緒に出掛けた時に行った茨城県潮来市の水郷周辺であろうと考えられる[2]。奈穂子の母と都の母は幼馴染で、結果的に奈穂子と都も幼馴染と言い得る関係であった。その奈穂子が再度同じ地域に旅をした時、「水鳥が、一羽だけ、暗い水の面にうかんでい」て「ちっともさみしくなさそう」で「あなたたちのママ」のように見えたという[3]。

---

1 川上弘美（2017）「2013 年／2014 年」『水声』文春文庫、文藝春秋、p.248。以下、本稿での引用は同書に拠る。
2 川上（2017）「女たち」、p.135。
3 川上（2017）「2013 年／2014 年」、p.248。

臺大日本語學術期刊資料庫

さて、この作品には平成 30 年に死刑が執行されたオウム真理教教祖と教徒が起こした無差別殺人テロであった、平成 7 年（1995）のいわゆる「地下鉄サリン事件」が背景にあり、その事件に遭遇した実弟が死を意識したことが理由となって姉弟は同居を始めることになる。また、作中には姉弟最愛の母の死についての話に一章が割かれており、いっそう死を意識させる作品となっている。

この禁断の愛と死を語る世界を冒頭と末尾で括るのが「太く、短く鳴く」夏の夜の鳥の声である。その鳥について作中では具体的な名称を述べることがないので、この〈夜に鳴く鳥〉の可能性を検討することで、この作品を多様な意味の下で解釈することができると考えられる。

具体的には、イギリス文学に登場するナイチンゲール（小夜啼鳥または夜鳴鶯と呼ばれる）、日中の文学に登場するホトトギス（時鳥）・フクロウ（梟）・ミミズク（木兎）・ヨタカ（夜鷹）、さらに奈穂子が都の母を連想した水鳥などが考えられる。これらの鳥について表現引用の関係を検討し、その上で多義的解釈を考えることにしたい。

二、川上弘美と『水声』について

川上弘美は平成 6 年（1994）に短篇「神様」で「パスカル短篇文学新人賞」を受賞[4]してデビューし、平成 27 年（2015）に『水声』で第 66 回読売文学賞を受賞し[5]、令和元年（2019）に 61 歳で紫綬褒章を受章、令和 2 年（2020）に『三度目の恋』を上梓し、「あとがき」で「伊勢物語をモチーフとした作品」と述べており[6]、川上は暗示ではなく明示として古典引用に至ったことになる。そこで、本稿で取り上げる『水声』は、前述のように一人称の語り手である「わたし」、すなわち都が実の同母弟である陵との相思相愛に至る話であり、姉

4 川上弘美（2002）「（自筆）年譜」『芥川賞全集　第 17 巻』文藝春秋、pp.495-496。
5 川上弘美（2017）「著者紹介」『水声』文春文庫カバー。
6 川上弘美（2020）「あとがき」『三度目の恋』中央公論新社、p.387。

臺灣大學藝術期刊資料庫

弟にとっての両親は異母兄妹関係だが、両親の間に性的関係は生じていないので、姉弟にとっての母は生母であっても父は継父であり、姉弟にとっての実父を自称する作中人物も登場している。こうした直系の血縁を持つ二世代に亘る近親者間の恋物語は他に類例を見ないと思われる。

『水声』に関する先行研究には未見の文献もある[7]が、主に高松楓（2018）「川上弘美『水声』論—自身の物語を取り戻す物語—」（東京女子大学『日本文学』第 114 巻、pp.125-143）、山根由美恵（2019）「〈地下鉄サリン事件〉というモチーフの可能性—辺見庸「ゆで卵」、村上春樹「アンダーグラウンド」、重松清「さつき断景」、馳星周「9・11 倶楽部」、川上弘美「水声」」（京都大学『MURAKAMI REVIEW』1、pp.36-72）、権田浩美（2019）「〈白い野〉に流れる水—川上弘美『水声』論—」（佛教大学国語国文学会『京都語文』第 27 号、pp.67-91）がある。

先行研究の高松楓（2018）では、都が「大変な痛みをともなう重要な体験を、自らの言葉で語り、それを自分自身の人生の中に位置付け、編み直す」という意味で「〈物語化〉」した作品である、と捉え、「1986 年の夏に起こった都と陵の交わり」には、「都」が亡母との関係において、「自己の中心を取り戻す役割を担」う行為だった、と説く。この指摘は日本社会における家族関係論において特有な「母子密着」の観点から見ても重要である。このような点は既に齋藤環（2006）『家族の痕跡』（筑摩書房）などにも詳しく論じられてきた。その点で価値ある論考であり、特に 1985 年夏の御巣鷹山に墜落した日航機事故と 1986 年春のチェルノブイリ原発事故の間に「ママ」の死が語られ、姉弟の性愛関係がママの死の直前の行為であり、「社会的な『死』と個人的な『死』とが重なり合って濃密な死の気配を

[7] 小山田浩子（2014）「文學界図書室『水声』川上弘美　かさぶたはぎのはて」（『文藝春秋』第 68 巻第 11 号）と山内昌之・片山杜秀・出口治明（2014）「文藝春秋 BOOK 倶楽部　鼎談書評」（『文藝春秋』第 92 巻第 14 号）という書評、松本和也著（2018）『現代女性作家の方法』精興社所収「『水声』論・記憶—声を語ること」がある。

帯びた時期」なので、姉弟の性愛関係は「これらの死の体験に抗する強いエロスの働きとしての意味が隠され」たと指摘する点は重要である。

山根由美恵（2019）では、地下鉄サリン事件をライト・モチーフとする作品を5作挙げて論じる中で最後に『水声』を取り上げ、「歴史的事件の中」で特に「〈サリン事件〉がこの物語の核をなす点、言語化できない不安を抱える陵の様相」において事件の被害者の特徴を描出していると捉え、この事件と近親相姦との関係性を論じている。概ね山根（2019）の指摘は首肯できるが、近親相姦に関する「罪悪感」を都が抱えているという前掲高松（2018）と同様に山根（2019）が一致している点に疑問を感じる。都には亡母への「後ろめたさ」があるとは思われるが、それは近親相姦に関する点ではないからである。

権田浩美（2019）では、都という名がまさに「みやこ」であり、陵の名を「みささぎ」と看做す先行研究に言及し、また「四人の家族の時間」が「時代の歩みと等しく時を刻み続けている」と指摘し、作中で繰り返し言及される「時計」に関し比喩的に論及するにとどまる。また、「頭の中で白い夏野となつてゐる」という「高屋窓秋」の「新興俳句」を指摘し、「都と陵の関係を象徴する」のが「白い野」であり「白い夏野」に起因すると述べ、川上が俳人であることも指摘している。

つまり、先行研究3篇では『水声』という作品に亡母の死が語られている点というだけではない死とエロス、死と死者、死にかかわる名を持つ弟などについての指摘という点で共通していることになる。

さて、作中の〈夜に鳴く鳥〉は西暦を章題とする4章[8]にだけ、5か所に出現するが、その鳥の名は明らかではない。具体的には次の

[8] 「西暦」を章題とする点に着目すると、この鳥はホトトギスかもしれない。川上弘美のホトトギス引用については齋藤正志（2019）「「墓を探す」の「ほととぎす」引用論」『川上弘美初期短篇研究—引用論による解読—』寂天文化事業股份有限公司、pp.62-86を参照のこと。

ような表現として記述されている。全 11 章で、「1969 年／1996 年」が第 1 章に相当し、その p.9 の全篇巻頭に当たる冒頭表現が「夏の夜には鳥が鳴いた。短く、太く、鳴く鳥だった。（改行）雨戸はたてず、網戸だけをひいて横たわれば、そのうちに体は冷えてくるはずだのに、その夏はいつまでも体が熱をもったままだった。」というものであり、第 11 章に相当する「2013 年／2014 年」の全篇巻末の掉尾表現の p.248 では「また夏がくる。鳥は、太く、短く鳴くことだろう。陵の部屋を、今日はわたしから訪ねようと思う。」と締め括られる。つまり、当該長篇は、〈夜に鳴く鳥〉の声で幕を開け、その声で幕を閉じるのである。

また、第 9 章に相当する「1986 年前後」の p.181 には「あの夏の夜、鳥はよく鳴いた。太い声の鳥だった。」と語られ、p.192 は「ママだけでなく、パパも、知っていたのだろうか。あの夏の、鳥が短く太く鳴いていた夜のことを。いや、あの夏のことだけにすべてを負わせるのは、きっとまちがっている。いつもそれはあったのだ。たぶん、わたしと陵が生まれたその時から。」と第 9 章を締め括っている。この章では前者では「ママが癌だとわかった夏」に頻繁に鳴き、後者では第 10 章に相当する「1986 年」の pp.208-209 と同じ場面で鳴く。

この第 10 章では「みやこ、と呼ぶ声を、女は今も時おり耳によみがえらせてみる。（改行）みやこ。（改行）りょう。（改行）遂に互いに呼びあった、あの夏の夜。【中略】始まった後には、もうためらわなかった。ママに声が届いてもかまわなかった。パパにだって。けれど二人の声はひそやかだった。体を重ねているたかぶりは、声にあらわれなかった。ベッドだけが、ぎしぎしと鳴った。鳥の声と、ベッドの軋みが、似ていると思った。窓の外の音だけが、よく聞こえた。鳥も、夜の蝉も、草の虫も、庭じゅうの小さな生きものが鳴いているようだった。男の体が、女の体に重なり、そのまま長い間二人で姿勢を変えながらむつみあい、最後に同時に果てた時には、もう何も鳴いていなかった。時計の音だけが、かちかちと響いていた。」という姉弟

臺灣大學學術期刊資料庫

の性愛場面に印象深く鳥の声が響いている。

三、〈夜に鳴く鳥〉の多様性

さて、日本に野生種は生息していないが、ナイチンゲールを挙げたい。サヨナキドリ（小夜啼鳥）や夜鳴鶯（よなきうぐいす）と呼ばれる Nightingale は、その声を賞美される「スズメ目ヒタキ科」の鳥類で「西洋の鶯とも言われる」鳴禽だが、「墓場鳥」とも呼ばれるらしく、「ヨーロッパ中央部・南部、地中海沿岸、中近東からアフガニスタンまで分布し、ヨーロッパで繁殖し、冬季にアフリカ南部に渡って越冬する渡り鳥で、森林や藪の中に生息し、夕暮れ後や夜明け前に鳴く」という。作中では都だけが耳にする夜の鳥の声であり、杉並区の家のそばから聞こえてくるのだから、何処かの家で飼育している可能性もある。

この鳥は例えばハンス・クリスチャン・アンデルセンの創作童話「よなきうぐいす」に「墓場の歌」を歌うなどする素晴らしい声を賞美される鳥として登場する。この童話は「中国」が舞台で「皇帝」も中国人で「世界中で一ばんきらびやか」な居城の「お庭」に「すばらしくじょうずにうたう、よなきうぐいす」が一羽すんでおり、「世界中の国ぐにから、旅人が皇帝の都にやって」くると「都と、お城と、お庭」を称賛した後に「よなきうぐいす」の声を聴くと必ず声を賛美した[9]。その声について海外から情報を齎された皇帝は全く初耳だったので、命令を下して、その鳥を探し求め、発見されると居城に連れてこられて「なんともいえずきれいにうたったので、皇帝は目に涙を浮かべた」のだが、後に「オルゴール」のように繰り返し歌う美術品の小鳥が献上され、「よなきうぐいす」は駆逐されてしまい、その美術品が故障してネジを巻かないと歌わなくなってしまった 5 年後に皇帝が病床に臥すようになると、次期皇帝も決

臺灣大學學術期刊資料庫

9 高橋健二（1979）「25 よなきうぐいす」『アンデルセン童話全集 1』小学館、pp.406-408。

定したために皇帝は生きていながら存在を忘れられてしまった[10]。胸の上に死神が載って皇帝を苦しめていた時、美術品の小鳥は周囲にネジを巻く人が誰もいなかったため皇帝を慰めてもくれず、皇帝が更に苦しんでいた時、あの「よなきうぐいす」が帰ってきて窓際で愛らしく歌い、死神の求めに応じて「墓場の歌」を歌ったので、死神は去っていき、死の床に臥していたはずの皇帝は快癒した、という[11]。このように美しい声を賞美されるとともに病気や死や死神、墓場と関わる点がアンデルセン童話に登場する「よなきうぐいす」、すなわちナイチンゲールということになる。

また、アガサ・クリスティの推理小説、あるいは犯罪未遂作品である短篇の「ナイチンゲール荘」では妻殺しで知られた犯罪者が新しい妻に返り討ちにされる話だが、その中で夫婦が住む家の名として使用されており、これも美しい鳴禽の名でありがら、アンデルセン童話にも出てくる「墓場の歌」を歌う鳥である点が関係していると考えられる。

そして最も印象的な恋物語ではウィリアム・シェイクスピアの戯曲「ロミオとジュリエット」が知られる。第 3 幕でロミオは殺人を犯し、逃亡することになる。その別れの朝に二人が耳にする鳥の声がある。その時ジュリエットは早朝の声ではなく、まだ夜に鳴くナイチンゲールだと主張するのだ。その声の間は、二人は別れずに済むからである。だが、やがてロミオによって雲雀だと指摘され、ジュリエットは一転して逸早き逃亡をロミオに促す。

アンデルセン童話にせよ、クリスティ推理短篇にせよ、シェイクスピア戯曲にせよ、ナイチンゲールは死と愛に関わる話に登場する鳴禽であり、その声を聴くことで病が癒えたり、犯罪を想起させたり、別れを防いだりする。都と陵が愛し合ったから母が病死したわ

[10] 高橋健二（1979）「25 よなきうぐいす」『アンデルセン童話全集 1』小学館、pp.408-418。
[11] 高橋健二（1979）「25 よなきうぐいす」『アンデルセン童話全集 1』小学館、pp.418-423。

臺灣大學藝術期刊資料庫

けではないが、母の耳にもナイチンゲールの声が響けば、或いは病が癒えたかもしれない。都と陵の恋は現在の日本では仮に公然化しても犯罪ではないが、禁忌性は否定できない。そして、その声を聴く都は弟との時間を少しでも長く感じることができたであろう。こうした意味で「夜に鳴く鳥」がナイチンゲールである可能性は認められるのではないだろうか。

一方、東洋にも西洋にも生息する〈夜に鳴く鳥〉に梟（フクロウ）がおり、その他に木菟（木兎、ミミズク）や夜鷹（ヨタカ）がいる。他にもミミズクの一種であるコノハズクの声は「ブッポウソウ（仏法僧）」と聞こえるが、長い間「ブッポウソウ」という別の鳥の声だと言われていた。『水声』に仏教的要素があれば可能性を指摘できるかもしれない。

そこで『倭名類聚抄[12]』の「第 18 巻羽族部第 28 羽族名第 231」には「木兎　爾雅注云木兎（和名都久或云美々都久）似鴟而小兎頭毛角者也」、「梟　説文云梟（古堯反和名布久呂布辨色立成云佐介）食父母不孝鳥[13]也爾雅注云鴟梟者分別大小之名也」、「恠鴟　爾雅注云惟鴟（漢語抄云與多加）晝伏夜行鳴以爲恠者也」と記述され、「鴟」は「鴟　本草云鴟一名鳶（鴟音祇鳶音鉛和名土比）爾雅注云鳶一名鴩（音狂漢語抄云久曾止比）喜食鼠而大目者也」だという[14]。これが鳶や鴩だとされ、それに似ているのがミミズクで、大きさの相違でフクロウと比べられ、ヨタカは、その生態ゆえに怪しい「鴟」のことらしい。なお、「日本国語大辞典　第二版」では「頭上に耳状の突き出した羽毛を持たない」のがフクロウであり、持つのがミミズクということになる。

---

12 中田祝夫編（1978 第一刷,1981 第二刷）『和名類聚抄（元和三年古活字版二十巻本）附関係資料集』勉誠社文庫 23 勉誠社、pp.202-203。

13 ちなみに注 15 の同頁に拠れば、「烏」は「唐韻云烏（哀都反和名加良須）孝烏也（下略）」とある。つまり、カラスは孝行する鳥で、フクロウは両親を食べる不孝な鳥だそうである。

14 「鴟」は「祇」と音読みするようだが、「祇」が「き」か「ぎ」か「し」か、ということは明確ではない。

また、古典文学作品においてフクロウ・ミミズク・ヨタカは和歌の八代集では、今のところ（手元に新編国歌大観第五巻までしかないので）未発見だが、西行の「山家集」に 1203 番歌「入道寂然、大原に住み侍りけるに、高野よりつかはしける（1198 番歌～1207 番歌）　山ふかみけぢかき鳥のおとはせで物おそろしきふくろふのこゑ」があり、フクロウの声は恐ろしいと詠まれ、慈円の「拾玉集」に 590 番歌「御裳濯百首　雑二十首（581 番歌～601 番歌）　いほりさすかた山しぎのみみづくもいかがききなす峰のまつ風」と 591 番歌「山ふかみ中中友となりにけりさよふけがたのふくろふの声」があり、前者はミミズクという言葉を詠み込んでいるだけの物名歌でヤマシギが主要歌材だが、後者ではフクロウの声が友と考えられるので、同じ出家者であっても西行と慈円とではフクロウに対する恐怖感と親和性との差異が認められる。

「藤原忠俊後度百首」649 番歌「寄鷹恋（647 番歌～654 番歌）　よたかすむはやしのはしにすむとりのとけてもえねぬこひもするかな」ではヨタカも恋をするか？と詠まれ、夫木和歌抄第 27 巻雑部 9 動物部「鷹」では、12791 番歌「御集　秋歌中　後九条内大臣　かりくらすかたののみのの秋風に夜たかつなぎて月や見るらむ」ではヨタカが集団で月見をしていると詠む。したがって、両者ともに恋や友情をヨタカに読み取っている。

「木菟」では、12794 番歌「百首御歌　土御門院御製　あしびきの山ふかくすむみみづくはうき世の（傍注異文：世のうき）事をきかじとや思ふ」と鳥の名に「耳」の意味を響かせ、12795 番歌「六帖題、新六二（「六二」ママ注記）　光俊朝臣　山風にならの葉がしは音たかしすむみみづくもききやおどろく」でも同様である。

「梟」には前出（「山家集」1203 番歌）の 12796 番歌「寂然が本へつかはしける十五首　西行上人　山ふかみけぢかき鳥の音はせで物おそろしきふくろふの声」と 12797 番歌「百首歌、恋　寂蓮法師物おもへば木だかき森にふくろふのくるしきかともとふ人ぞなき」

があり、寂蓮はフクロウには苦しみを尋ねる者さえいない、と詠んでおり、西行のフクロウの声への恐怖と対立する寂蓮のフクロウへの共感が看取される。

以上の先行文献に基づくと、日本の古典世界、就中、和歌ではヨタカも「寄鷹恋」や「秋」の歌に詠まれ、決して歌材として無縁ではないが、山に住む出家者の歌人、西行・慈円・寂蓮のうち、特に西行がフクロウの声に恐怖を感じている。

また、『水声』の夜に鳴く鳥の声がナイチンゲールだとすれば、前述のように童話も推理短篇も戯曲にせよ、ナイチンゲールは死と愛に関わる鳴禽であり、その声を聴くことで病が癒えたり、犯罪を想起させたり、別れを防いだりするが、童話の快癒や推理短篇での「墓場の歌」を歌う点に着目すると却ってフクロウとも重なり合ってくるのではないだろうか。この場合は多義的解釈というだけではなく、多重的解釈ということになる。

特にフクロウについては前述の「夕顔」や「蓬生」の場面に白氏文集第1巻諷諭「凶宅」の引用が指摘されている。「漢籍・史書・仏典引用一覧」に拠れば「長安大宅多し　列なりて街の西東に在り往往朱門の内房廊相対して空し　梟は松桂の枝に鳴き[梟鳴松桂枝]狐は蘭菊の叢に蔵る[狐蔵蘭菊叢]　青苔黄葉の地　日暮れて旋風多し（原文は片仮名交じり文）」を挙げながら、「夕顔」では「確実な典拠とできるかどうかは、なお検討の余地があろう」とする[15]が、「蓬生」では明らかに「凶宅」の引用が認められる。

この不気味な印象は、後に入水を企図して出奔し行方不明になった「浮舟」の比喩で認めるのは困難かもしれないが、「出雲国風土記（意宇郡）」で「梟は悪鳥なり」と記され、「常陸国風土記（茨城郡）」で先住していた国栖の人間性を評して「狼性梟情」と記さ

臺灣大學學術期刊資料庫

[15] 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳（1998）『源氏物語 1』古典セレクション小学館、p.318。

れている[16]ことを考え合わせて内舎人の声や話し方を以てフクロウを超えるとするなら、あるいは「凶宅」のような不気味な印象を与えられるとも言い得ようか。これもまた『水声』の姉弟の恋に不気味な印象を与えることになるだろう。もちろん姉弟の恋が将来どうなるのか、ということについては明確ではないが。

そこでフクロウは「日本国語大辞典　第二版」で『詩経』「大雅」鄭箋では「梟・鴟、悪声之鳥」とされ、中世文学で老人や僧侶に比喩され、近世になると鳥捕獲用囮として使われたそうである。特にフクロウが印象的なのは『源氏物語』である。第 4 巻「夕顔」で夕顔が「某の院」で急死した時、「夜半も過ぎにけんかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして松の響き木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、〈梟はこれにや〉とおぼゆ[17]」と光源氏は異様な嗄れ声の鳥をフクロウと断ずる。西行が「もの恐ろしき」と後に評した声である。また、第 15 巻「蓬生」では荒廃した常陸宮邸を「もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処になりて、疎ましうけ遠き木立に、梟の声を朝夕に耳馴らしつつ、人げにこそさやうのものもせかれて影隠しけれ、木霊など、けしからぬ物ども所を得てやうやう形をあらはし、ものわびしきことのみ数知らぬ（下略）[18]」と地の文で語り、狐・梟・木霊が登場する怪奇な印象である。さらに第 51 巻「浮舟」では宇治の浮舟の家に、いかつい内舎人が来て脅かすような発言をした感想として「ふくろふの鳴かむよりも、いとものおそろし[19]」と語り、源氏や西行と同じくフクロウの声が恐怖の対象となり、それを超えるものとして内舎人の声を評している。廃屋の松風や荒廃した庭の様子でのフクロウの声が不気味なのは心

16 倉田実（1994）「梟」『國文學　解釈と教材の研究　10 月臨時増刊号』第 39 巻第 12 号。
17 自由直接言説（佐藤敬子先生直話）。この後で鶏鳴があり、魔性の夜が明ける。引用本文は阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳（1998）『源氏物語 1』古典セレクション小学館、p.241。
18 引用本文は阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳（1998）『源氏物語 5』古典セレクション小学館、p.16。
19 引用本文は玉上琢彌訳注（1975 初版,1987 八版）『源氏物語　第十巻』角川文庫 2216 角川書店 p.73。

臺大日本語文研究期刊資料庫

象風景とも相まって重要だが、第51巻「浮舟」が宇治の川音を心象風景としている点を忘れてはならない。何故なら、そもそも本論文の対象作品が『水声』というタイトルだからである。フクロウが「浮舟」と関わるフクロウとして、『水声』に暗示引用されているとすれば、前述のように宇治が水音を伴う点と符合する。『源氏物語』第51巻「浮舟」での「水の音の恐ろしげに響きて行く（p.62）」や第52巻「蜻蛉」での「さる水におぼれけん（p.104）」・「水の近きをたよりにて（p.109）」・「いみじう憂き水のちぎりかな（p.109）」・「水の底に身を沈めても（p.129）」、第53巻「手習」での「川波も荒う聞こえしを（p.150）」など、宇治川は憂いの川である。その水音は死へ誘っていく。

『水声』の最終章の末尾で都は陵と旅に出る。それは長年住んだ思い出の家を取り壊す間の二泊三日の小旅行である。その行き先は前述のとおり、かつて奈穂子と都が同行した茨城県潮来市の水郷周辺である。出発した日の翌朝に目覚めた都は陵のベッドに移り、「「怖いわね」（改行）「うん、怖い」【中略】「何が、陵は怖いの？」（改行）「好きだっていう気持ちが」【中略】ママの視線を感じた。でも、それでいいと思った。いつもわたしと陵は裁かれている。わたしたちを知るすべての人々に。けれど、真にわたしたちを裁いてくれる者など、ほんとうはどこにも存在しない。【中略】（改行）ふいに水の音が聞こえた。遠い世界の涯（はて）にある、こころもとなくて、ささやかな流れの。（pp.247-248）」と語り合い、そして都は「水の音」を聞く。これは浮舟が耳にした死の誘い水でもあろう。

四、おわりに

冒頭で述べたように『水声』の名は都が不意に聴こえてくる「遠い世界の涯（はて）にある、こころもとなくて、ささやかな流れの」水音を聴くことに由来する。この水音と同様に都が聴く〈夜に鳴く鳥〉の声が作中で印象的に響く。前章の末尾で述べたように、この

水音は都と奈穂子、都と陵、それぞれが赴いた水辺の町で都の耳に聴こえてくる音である。小説の題目は「水声」ということで単なる「音」ではなく、何かの生物のような意志を持った「声」である。しかし、同行者の耳に届いていたか否か、ということについては作中で言及されることはない。もし、この水の声や鳥の声が都にだけ聴こえているとすれば、それは亡母の声とも響き合う。したがって、今一歩、声という観点から踏み込めば、鳥の声と水の声は都の恋、すなわち姉弟の禁忌の恋を咎めつつも許している亡母の声だと考えられるだろう。

そこで、この夜に鳴く〈鳥〉については作中でも特定されていないが、敢えて本論文では鳥の名を具体的に考えていくことで当該作品の世界を解釈することができると考えている。その具体例として掲げたのがナイチンゲールとフクロウなどであった。アンデルセン童話で死の床にある中国皇帝を蘇らせる鳴禽である「よなきうぐいす」は「夜鳴鶯」であり、その名を冠する家に住む夫婦が互いを死に誘い合う推理世界をクリスティの「ナイチンゲール荘」で読むことが出来る。また、シェイクスピアの著名な悲劇「ロミオとジュリエット」では殺人を犯し逃亡するロミオとの別れを先へ伸ばそうとするジュリエットの緊張感をナイチンゲールの声に看取することが出来た。これら死にまつわる鳥のイメージは夜に鳴く墓場の歌を歌う点に集約される。ただし、「太く、短く」という『水声』の鳥の声からは少し遠いかもしれない。

一方、「太く、短く」という声に相応しい夜の鳥にヨタカ、ミミズク、そしてフクロウが印象深い。特にフクロウは両親を食べる不孝鳥であり、禁忌の恋を生きる姉弟に相応しくも思われる。特に姉は亡母の声が聴こえることで自らの禁忌の恋を咎められていると感じている。フクロウの声は『源氏物語』の浮舟が聴く内舎人の声ほどの不気味さはないけれども、夕顔が急死した「某の院」や末摘花が住む常陸宮の荒廃した邸でのフクロウの鳴く声は『白氏文集』の

「凶宅」の引用とも相まって不気味な印象を強く与えており、和歌の世界では西行が恐怖を感じている。ナイチンゲール（ロミオとジュリエット）であっても、フクロウ【源氏物語】やミミズク（和歌）やヨタカ（和歌）であっても、恋と関わることは明らかで、前者なら別れと死、後者も怪奇で恐怖の対象、それぞれの〈夜に鳴く鳥〉の暗示引用となり得る。

そこで、『水声』の夜に鳴く鳥の声がナイチンゲールだとすれば、前述のように童話も推理短篇も戯曲にせよ、ナイチンゲールは死と愛に関わる鳴禽であり、その声を聴くことで病が癒えたり、犯罪を想起させたり、別れを防いだりするが、童話の快癒や推理短篇での「墓場の歌」を歌う点に着目すると却ってフクロウとも重なり合ってくるのではないだろうか。この場合は多義的解釈というだけではなく、多重的解釈ということになる。だとすれば亡母の声が水の声や鳥の声と重なり合うということも考えられるのではないだろうか。確かに亡母は二人を見詰めているようで、「ママの視線」を都は感じているし、「いつもわたしと陵は裁かれている」と思うが、この時、都は「でも、それいいと思った」のだ（最終章「2013年／2014年」p.247）。そして彼の隣にいることが彼女の「幸福」であり、幸福そのものに恐怖を感じて、前述の「遠い世界の涯」の水音を聴いたのである（p.248）。さらに付言すれば、奈穂子が一人旅で見た「暗い水の面」に浮かんだ一羽の「水鳥」は「ちっともさみしくなさそう」で「あなたたちのママ」みたいだった、と語られたことが都の回想にある（p.248）。これは〈夜に鳴く鳥〉に水鳥を想定させ、鳥が母であり、亡母の声が鳥の声を意味すると考えることもできるのではないか？つまり、姉弟の禁忌の恋は、疑似的な近親恋愛を持った亡母によって許された恋だったことになる。だから、作品末尾で「また夏がくる。鳥は、太く、短く鳴くことだろう。陵の部屋を、今日はわたしから訪ねようと思う」と都は「世界」を共有する弟の

臺灣大學學術期刊

部屋で夏の夜に鳴く亡母かもしれない鳥の声を聴くために自ら訪れることを宣言して当該作品は完結するのであろう。

ただ、一つ問題がある。前述のように川上弘美は俳人でもある。そこでフクロウは季語では冬だという。また、和歌でも秋となっていた。ところが、『水声』で繰り返される季節は、夏である。〈夏の夜に鳴く鳥〉だとすれば、渡り鳥であるナイチンゲールやヨタカは別として、ミミズクやフクロウは該当しない。そこでクローズアップされるのは「ホトトギス（時鳥）」となる。嘗て筆者は川上の初期短篇「墓を探す」の中で 6 か所も言及される時鳥について論じたことがある。今回の『水声』では鳥の名前が明記されないので、様々な可能性を考えたのだが、〈夏の夜に鳴く鳥〉だとすれば、時鳥の可能性が大きくなる。また、鳥の名の中に「時」があることに注目すれば、時計を収集し、家の一部屋に集めていた「パパ」の存在が関係してくる。ということで、まだまだ『水声』には考える余地―多義的な、多重的な、多層的な―解釈があることになるのだ。

【付記】本論文は 2021 年度「台湾日本語教育研究」国際学術シンポジウム―with コロナ時代の日本語教育を目指して―（2021 年 11 月 27 日・於中華民國／新北市新莊區中正路 510 號輔仁大學德芳外語大樓）で口頭発表した「川上弘美『水声』の〈夜に鳴く鳥〉の可能性―ウイズコロナ時代における古典と現代の共鳴―」を基にして全面的に改稿したものである。席上ご意見を賜った先生、ならびに当時発表を許可された学会当局に感謝申し上げる。

【参考文献】

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳（1998）『源氏物語1』古典セレクション小学館、p.241,318

臺灣大學學術期刊資料庫

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳（1998）『源氏物語5』古典セレクション小学館、p.16

川上弘美（2002）「（自筆）年譜」『芥川賞全集　第17巻』文藝春秋、pp.495-496

川上弘美（2017）『水声』文春文庫、文藝春秋、pp.9-248

倉田実（1994）「梟」『國文學　解釈と教材の研究　10月臨時増刊号』第39巻第12号

権田浩美（2019）「〈白い野〉に流れる水—川上弘美『水声』論—」佛教大学国語国文学会『京都語文』第27号、pp.67-91

齋藤正志（2019）『川上弘美初期短篇研究』寂天

齋藤正志（2021）「川上弘美『水声』の近親間恋愛における平安物語の暗示引用—現代と古代の境界線—」『台灣日本語文學報』49號、pp.1-25

高橋健二（1979）「25よなきうぐいす」『アンデルセン童話全集１』小学館

高松楓（2018）「川上弘美『水声』論—自身の物語を取り戻す物語—」東京女子大学『日本文学』第114巻、pp.125-143

玉上琢彌訳注（1975初版,1987八版）『源氏物語　第十巻』角川文庫2216角川書店、p.73

中田祝夫編（1978第一刷,1981第二刷）『和名類聚抄（元和三年古活字版二十巻本）附関係資料集』勉誠社文庫23勉誠社、pp.202-203

山根由美恵（2019）「〈地下鉄サリン事件〉というモチーフの可能性—辺見庸「ゆで卵」、村上春樹「アンダーグラウンド」、重松清「さつき断景」、馳星周「9・11倶楽部」、川上弘美「水声」」京都大学『MURAKAMI REVIEW』1、pp.36-72

臺灣大學學術期刊資料庫